

ソーシャル・プラクティスとアート研究会

・研究会について

本研究会は、現代美術に関する文献を用いた講読会を通して、とりわけ2000年代以降により社会的実践として問われている現代美術の在り方についての知見を深めることを目的としています。

・これまでの活動について

昨年度から活動する本研究会では、昨年度にキュレーターのニコラ・ブリオーによる書籍『ラディカント』の講読会を実施、西洋主体の還元的な「多文化主義」とは異なる、対象の特異性を扱うためブリオーが提唱する「翻訳」という概念を批判的に検討しました。それに加えて、その理論の実践的な事例を見るため、京都国際会館で開催されたアートフェア「Art Collaboration Kyoto」のフィールド調査、検討会を実施してきました。



ニコラ・ブリオー

『ラディカント——グローバリゼーションの美学に向けて』
(フィルム・アート社、2022年)

・今後の活動について

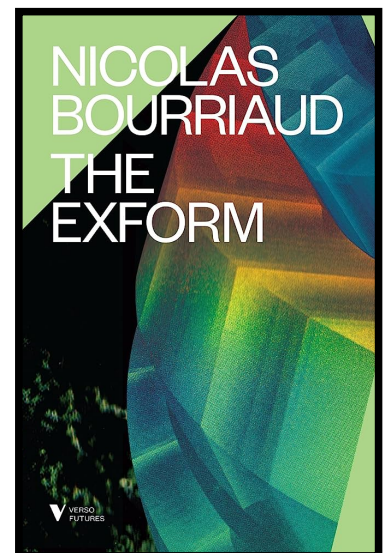
今年度の研究会では、昨年度に引き続きニコラ・ブリオーの著作から、『ラディカント』の後に発表された『The Exform』という文献を取り扱った講読会を実施しています。さらに講読会のほか、国立国際美術館（大阪・中之島）、「Art Collaboration Kyoto」（京都）、京都市京セラ美術館（京都）といった関西圏で開催される現代美術を扱う展覧会・アートフェアへのフィールド調査を予定しています。

以下は連絡先です

研究会代表：藤本流位

mail : gr0425fk@ed.ritsumei.ac.jp

ニコラ・ブリオー『The Exform』（Verso、2016年）



・所属メンバーの紹介

藤本流位（表象領域 5 回生）

2000年代以降の現代美術の作品、作家を事例に、出来事や状況の運営者としてのアーティストが生み出す暴力の表象を研究しています。

Kim Kyo（表象領域 4 回生）

デジタル空間内での個人主権概念、デジタル法システムについて研究しています。また、フランスを拠点とするアート・コレクティブBlack(s) to the Futureのメンバー、デジタル/映像アーティストとしても活動しています。

北村公人（表象領域 2 回生）

フランスの精神分析家であるジャック・ラカンにおける「喜劇」について研究しています。

高畑和輝（表象領域 2 回生）

日本の現代音楽作曲家である、武満徹の1970年代後半以降の作品がもつ特有のテクスチャの分析、あるいは作品受容の研究。1980年代の作曲家の思想の展開を研究している。